



Title	女子短大学生の「子ども観」に関する研究2：保育職志望度と地域特性との関連で
Author(s)	島袋, 恒男; 當山, りえ; 喜友名, 静子
Citation	琉球大学教育学部紀要 第一部・第二部(52): 193-199
Issue Date	1998-03
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/1935
Rights	

女子短大学生の「子ども観」に関する研究Ⅱ

— 保育職志望度と地域特性との関連で —

島袋 恒男*、 當山 りえ**、 喜友名 静子***

Women's College Students' Perceptions of Children

要 約

本研究は、保育科短大生216名を対象とし、①保育科学生の「子ども観」尺度を作成し、②保育職への志望度の違いによる「子ども観」の違いを検討することを目的とした。因子分析の結果、「子ども観」尺度価値体系の第1因子は、「立身出世」の因子、第2因子は「親族主義」因子、第3因子「伸び伸びした存在」の因子、第4因子「自己制御」因子が抽出された。概念体系においては6因子が抽出され、第1因子「可能性」因子、第2因子「否定的」因子、第3因子「あてになる存在」の因子、第4因子「自立的存在」因子、第5因子「個としての存在」因子、第6因子「了解可能な存在」の因子と命名した。

沖縄県と愛媛県の地域比較の結果、親族主義的価値観は沖縄県の方が高かった。概念体系においてポジティブな「子ども観」の2因子において、沖縄県の方が肯定度が高かった。

志望度別の比較から、保育職を志望する群の方が、志望しない群よりも子どもをいとおしくまた個性的な存在として、肯定していることが明らかになった。愛媛県の方が志望度の違いと子ども観との関連が深かった。

1. 研究の背景と目的

本研究では、保育者養成の一貫として、大学生の「子ども観」をとりあげる。教師の子どもに対する接し方には個人差がある。この違いには経験や指導技術など様々な要因があると考えられる。教師の子どもに対する認知の仕方も、子どもへの接し方に多大な影響を与えると思われる。本研究では「子ども」に対する認知の仕方を、「子ども観」とよぶ。具体的には、「子どもは一個の人格を持つ人間である」、「子どもは親の一部分・物である」、「子どもはあらゆる可能性・能力を持っている」、「子どもは無力・無能な存在である」、「子どもはかわいい存在である」、「子どもは憎らしい存在である」といったものがある。「子ども観」の持つ力として、例えば母親の持つ「子ども観」はその母親の養育態度に影響を及ぼしている。「子

どもは泣くものだ」と考える母親は、子どもが泣いてもさほど神経質にはならない。

「子ども観」は厳密な意味での学術用語ではない。心理学の学術用語の中で、これに近い意味を持つ用語としては「児童観=子どもをどのようにみるか」、「発達観=子どもの成長発達をどのように考えるか」がある。小嶋(1982)は、両者は切り離すことのできない連続する意識であるとし、「児童発達観」という命名をしている。母親の場合は「育児観=育児をどのようなものと考えるか」も関連が深いであろうし、教師の場合は「教育観=教育をどのように捉えるか」も関わってくるだろう。本研究では、厳密な定義は困難であるため、「子どもをどう捉えているか」という程度の広い意味で「子ども観」という用語を使用する。

「子ども観」に関する実証的な研究には、次のようなものがある。

柏木 (1978) は、母親の養育態度が、母親の子ども観と役割意識の反映であることを、乳幼児を持つ日米の母親を対象に観察・比較している。これによれば、日米の母親の子どもへの働きかけの違いは、母親が子どもと母親との関係をどう考えているかの違いであると述べている。日本の母親は乳児を「小さく、弱く、助けのいる存在である」と考えている。さらに、母親と子どもは不可分で密接な関係であると考えられるために、接触時間は長く、子どもをなだめたり、あやしたりする傾向がある。逆にアメリカの母親は、乳児といえども「母親とは別個の存在」であり、「赤ちゃんは活発であるのが良い」という意識が、母親に乳児と離れた時間を持たせ、赤ちゃんに対して発声や活動を促すような働きかけをすると柏木は解釈している。

永澤 (1996) は、母親を対象に「こども観」尺度を作成し、6つの因子を見いだした。さらに、母親が持つ子ども観と子どもに対する母親の養育態度との関係について検討した。その結果、子どもの加齢に伴う子ども観の変化はないが母親の年齢により子ども観は変化することや、次のような母親の子ども観と養育態度との関係が示された。子どもを「一個の人間」として捉え、子どもの存在を尊重している母親は、子どもに対して拒否的、支配的でない。子どもを「否定的な存在」として捉えている母親は、子どもに対して拒否的、支配的、不一致的な態度をとる。子どもを「愛しい存在」と捉えている母親は、子どもに対して拒否的、支配的でない態度を示したり、かわいいあまり保護的、矛盾的な態度をとる。子どもを「親の一部分・私物」と捉えている母親は、子どもに対して拒否的、支配的、保護的、服従的、矛盾的な態度をとる。子どもを「不完全な存在」と捉えている母親は、子どもに対して支配的、保護的、服従的な態度をとること等が明らかになった。

子ども観に影響する要因の1つに地域差・文化差がある。藤永 (1983) は、児童観や育児観は長い文化的伝統や社会、経済的条件を基盤として形成されていると述べているが、友利 (1995) は、母親の子ども観の地域差を検討した。東京都豊島区と沖縄県那覇市を比較した結果、前者は「個人主義的」、つまり子どもを独立した一個の人格者

として捉え、後者は「同胞主義的」、つまり子どもを家族の一員として捉えていることが見いだされた。友利の研究の優れた所は、子ども観を価値体系、概念体系、技術体系の3側面に分けていることと、沖縄県に特有な子ども観の因子が追加されたことである。彼女の研究はインタビューを中心とした質的研究であり、実証的研究としては調査項目が少なく、因子分析がなされていなかった。本研究では調査項目を増やし、因子分析を行って子ども観尺度を作成し地域比較を行いたい。

以上のように「子ども観」についての研究は母親を対象としたものが多いが、教師にとっても子ども観は重要な概念である。吉田・佐藤 (1991) は、教育実習の時期、性別の要因が教育実習生の子ども観に与える影響の分析を行い、教育実習の時期による子どもたちに対する評価は、ポジティブなものから、ネガティブなものへと変化し、再度ポジティブな評価に安定するという一貫した傾向が認められることを示した。教師の中でも、教科指導がなく、年少の子どもと接する保母にとっては「子ども観」は、子どもとの接し方に直接的な影響力を持つであろう。また、柴田 (1995) は、保育経験の違いによって、子ども観が変化することを見いだしている。

本研究では、保育者養成の一貫として、保育科学生の「子ども観」を検討する。「子ども観」の相違によって、子どもへの接触の仕方、ひいては保育実習の正否にも影響するのではないかと思われる。また、子ども観の地域比較も行いたい。地理的・歴史的背景の異なる沖縄県と他県では、子どもに対する概念にも違いがみられるのではないかと予想される。

本研究の第1の目的は、保育科学生の「子ども観」を検討する尺度を作成することである。その際、永澤 (1996) の母親の子ども観尺度に友利 (1995) の尺度も加味して、沖縄県特有な因子も追加して、新たな保育者用の尺度を作成したい。そこで第2の目的としては、沖縄県と愛媛県の保育科の学生の子ども観を比較したい。愛媛県を対象として選んだ理由は、地方都市であることと、大学の規模が同程度であることを基準とした。第3の目的は、「子ども観」に影響する要因として、保育職への志望度を取り上げる。保育科には、保

母になりたいと志望する者と、保育科であっても保育職以外の職業を選択する者がいるので、研究の第一段階として、保育職への志望度の違いによる「子ども観」を検討する。

い(5点)・「できたらなりたい(4点)・「何とも言えない(3点)・「あまりなりたくない(2点)・「絶対なりたくない(1点)」の5件法で回答を求めた。

2. 方 法

1. 被験者；沖縄県のk短期大学保育科2年生117名(女子のみ)。愛媛県のs短期大学保育科1年生99名(女子のみ)。
2. 調査時期；1997年10月中旬から下旬。クラスで一斉に実施した。
3. 調査尺度
子ども観尺度(価値体系16項目、概念体系39項目)
 - 1) 価値体系：友利(1995)の13項目と国吉(1990)の最終的価値の項目を参考にし、予備調査から得られた項目を用いて3項目を追加した。
 - 2) 概念体系：永澤(1996)の21項目に友利の14項目を追加した。それぞれの項目について、「非常にあてはまる(5点)」から「全くあてはまらない(1点)」の5件法で回答を求めた。
 - 3) 志望度は「将来保育職につきたいですか」という問いに対し、「是非なりた

3. 結果と考察

1. 「子ども観」尺度の因子分析の結果

沖縄県の対象者のみの「子ども観」尺度について、因子分析(主因子法、バリマックス回転)を行った結果、価値体系では4因子、概念体系では6因子が抽出された。価値体系の結果を表1に示した。

価値体系の第1因子は、「安定した職業についてほしい」、「将来は親に楽させてほしい」、「社会的地位の高い人になってほしい」などの5項目が高く負荷していたので、「立身出世」の因子と命名した。

第2因子は子どもの人間性を育むためには「祖父母との関係が大切だ」、「親戚とのつきあいが大切だ」、「近所の人達とのふれあいが大切だ」などの5項目が高く負荷していたので「親族主義」因子と命名した。

第3因子は「誰とでも仲良くできることは大切だ」、「勉強よりも思いきり遊んで欲しい」、「可能

表1. 価値体系の因子分析結果

NO	項目の内容	因子1	因子2	因子3	因子4	h ²
14	将来は安定した生活ができるようにいい職業に就いてほしい	.826				.711
16	将来は親を楽させてくれる人になってほしい	.788				.651
15	将来は社会的地位の高い人になってほしい	.721				.526
9	男の子には男の子らしく、女の子には女の子らしく育ててほしい	.480				.355
7	すすんで親の面倒をみてくれるような人になってほしい	.399				.276

11	子どもの人間性を育むためには、祖父母との関係が大切だ		.798			.666
12	子どもの人間性を育むためには、親戚との付き合いが大切だ		.743			.574
13	子どもの人間性を育むためには、近所の人達とのふれあいが大切だ		.684			.488
10	子どもの人間性を育むためには、兄弟は多いほうがいい		.508			.293
5	社会への貢献より自分を大切にす人になってほしい		.409			.328

1	子どもにとって誰とでも仲良くできることは大切だ			-.748		.667
8	子どものうちは勉強よりも思い切り遊んでほしい			-.687		.551
6	失敗を恐れずに可能性を追求するような人になってほしい			-.583		.441

4	友達ともめ事を起こしてでも、自己主張をすることは大切だ				.703	.543
2	子どもにとってライバルはいた方がいい				.663	.534
3	友達と仲良くするために、自分を抑えることも必要だ				.656	.630
固 有 率		2.643	2.335	1.655	1.601	8.235
寄 与 率		16.519	14.595	10.344	10.009	51.466

表2. 概念体系の因子分析結果

NO	項目の内容	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	因子6	h ²
31	子どもは素晴らしい力をもっている	.726						.556
19	子どもはあらゆる可能性をもっている	.710						.601
1	子どもの可能性は計り知れないほど大きい	.665						.502
26	子どもの能力は無限である	.621						.494
15	子どもは子どもなりの世界をもっている	.618						.422
6	子どもは発想が豊かである	.599						.489
13	子どもは大人より物事を鋭く把握しているところがある	.570						.341
23	子どもは個性をもっている	.559						.398
14	子どもは人間として尊重されなければならない	.556						.446
5	子どもは親とは別の一人の人間である	.542						.492
36	子どもは次の社会を担うものだ	.519						.380
12	子どもは愛しい	.513						.500
22	子どもは生きる力がある	.496						.309
33	子どもは愛らしい存在である	.494						.598
21	子どもは純粋である	.480						.461
10	子どもの将来は環境によってどのようにもなる	.445						.337

30	子どもはうるさい		.750					.579
9	子どもは生意気だ		.724					.592
35	子どもはわがままだ		.683					.533
7	子ども何を考えているか分からなくて困る		.556					.454
25	子どもは面倒くさい存在である		.479					.459
28	子どもは目に入れても痛くない		-.403					.616

37	子どもは家庭の稼ぎ手として役に立つ存在だ			.690				.525
38	子どもは老後の経済的な支えになるものだ			.656				.510
24	男の子は是非家を継ぐべきだ			.655				.553
34	子どもは親の言うことを聞かなければならない			.629				.547
29	子どもは親に口答えをしてはならない			.587				.494
28	子どもは目に入れても痛くない			.492				.616
11	子どもは一人では何もできない			.415				.423

27	子どもは親の保護なしでは生きていけない					-.709		.585
32	子どもは一人では生きていけない					-.666		.539
33	子どもは愛らしい存在である					-.534		.598
12	子どもは愛しい					-.469		.500
11	子どもは一人では何もできない					-.429		.423

2	子どもは未熟である					-.745		.601
20	子どもは不完全である					-.633		.532
3	子どもは天使のようだ					-.493		.550
21	子どもは純粋である					-.403		.461

4	子どもでも説明すればどんなことでも理解できる						.627	.538
17	親を見れば子どもの性格は大体わかる						.589	.486

	固有値	5.739	2.949	2.849	2.372	2.137	1.839	17.884
	寄与率	15.941	8.190	7.914	6.589	5.936	5.108	49.678

性を追求する人になって欲しい」の3項目がマイナスに負荷していたので「伸び伸びした存在」の因子と命名した。

第4因子は「自己主張」、「ライバル」、「自分を抑えること大切」の3項目が高く負荷していたので「自己制御」因子と命名した。

概念体系(表2)の第1因子は「素晴らしい力」、「あらゆる可能性」などの16項目が高く負荷していたので「可能性」因子と命名した。

第2因子は「うるさい」、「生意気」など6項目

が高く負荷していたので「否定的」因子と命名した。

第3因子は「稼ぎ手」、「老後の経済的支え」、「男子は家を継ぐべき」の7項目が高く負荷していたので、「あてになる存在」の因子と命名した。

第4因子は「親の保護なしでは生きられない」、「一人では生きていけない」などの5項目がマイナスに負荷していたので「自立的存在」因子と命名した。

第5因子は「未熟」、「不完全」、「天使のようだ」

など4項目がマイナスに負荷していたので「個としての存在」因子と命名した。

第6因子は「説明すればどんなことでも理解できる」、「親を見れば子どもの性格は大体わかる」の2項目が高く負荷していたので、「了解可能な存在」の因子と命名した。

2. 信頼性係数

価値体系と概念体系の信頼性を検討するためにクロンバックα係数を算出し表3に示した。0.4～0.8までの値をとっており、概ね満足すべき値であったので、子ども観尺度の価値体系、概念体系ともに、信頼性のある尺度が作成されたといえる。

表3. 信頼性係数 (クロンバックα)

価値体系		概念体系	
因子1	.705	因子1	.867
因子2	.429	因子2	.579
因子3	.504	因子3	.728
因子4	.528	因子4	.634
		因子5	.627
		因子6	.431

以上のように、本尺度は、保育者用の子ども観尺度として使用できることが示唆された。これまでの結果から、保育科学生の子ども観は、価値体系の第1因子は、「立身出世」の因子、第2因子は「親族主義」因子、第3因子「伸び伸びした存在」の因子、第4因子「自己制御」因子と命名した。

概念体系においては6因子が抽出され、第1因子「可能性」因子、第2因子「否定的」因子、第3因子「あてになる存在」の因子、第4因子「自立的存在」因子、第5因子「個としての存在」因子、第6因子「了解可能な存在」の因子と命名した。

3. 子ども観下位因子の地域比較

地域別に因子ごとに各項目の平均値を算出し、

表4に示した。価値体系の第2因子「親族主義」や概念体系第1因子「可能性」および第6因子「了解可能な存在」において地域差が有意となった。すべて沖縄県の平均値が愛媛県より高かった。

親族主義的価値観は、友利の同胞主義にあたるもので、予想どおり沖縄県の方が高かった。概念体系で高かった2因子はポジティブな「子ども観」因子といって良いが、沖縄県の方が肯定度が高いといえる。

表4. 子ども観尺度下位因子における地域比較

	全体		沖縄		愛媛		t値
	̄	SD	̄	SD	̄	SD	
価値因子1	16.237	2.776	15.965	3.010	16.568	2.716	.1448
◆ 因子2	18.486	2.533	18.833	2.206	18.073	2.827	2.142*
◆ 因子3	12.702	1.551	13.034	1.520	12.747	1.580	1.355
◆ 因子4	10.702	1.838	10.888	1.683	10.919	2.017	.124
概念因子1	75.162	7.517	77.318	5.915	72.638	8.391	4.530***
◆ 因子2	29.885	5.773	30.009	5.460	29.737	5.512	.357
◆ 因子3	5.075	2.623	5.009	2.749	5.155	2.476	.404
◆ 因子4	-0.807	2.311	-0.870	2.254	-0.732	2.387	.731
◆ 因子5	3.075	1.621	3.017	1.543	3.144	1.714	.569
◆ 因子6	3.948	1.561	4.224	1.653	3.619	1.380	2.868**

*P<.05, **P<.01, ***P<.001

4. 保育職志望度と子ども観との相関

将来保育職を志望するかどうかについて5段階評定させた。志望度が高いほど得点が高いことになる。志望度と子ども観の各下位因子得点との相関を地域別に算出した(表5、表6)。

沖縄県で有意な相関が得られたのは、概念体系の第2因子「否定的存在」のみが負の相関関係にあった。すなわち、志望度が高いほど子どもについては否定的に捉えないという結果であった。その他の項目では有意な相関関係はみられなかった。

愛媛県では価値体系の第1因子「立身出世」と志望度の間に有意な正相関が得られた。志望度が高いほど子どもに立身出世を願うことが分かった。概念体系の第1因子「可能性」、第4因子「自立的存在」との間に正相関、第2因子「否定的」との間に負の相関が得られた。志望度が高いほど、子どもを可能性があり、自立的存在として捉えており、否定的でないと考えていることが分かった。

表5. 沖縄県における子ども観尺度下位因子得点と保母職志望度との相関

	(価F-1)	(価F-2)	(価F-3)	(価F-4)	(概F-1)	(概F-2)	(概F-3)	(概F-4)	(概F-5)	(概F-6)
	立身 出世	親族 主義	伸び伸び した 存在	自己 制御	可能性	否定的	あてになる 存在	自立的 存在	個としての 存在	了解可能 な存在
保母職 志望度					-.320**					

** P<.01

表6. 愛媛県における子ども観尺度下位因子得点と保母職志望度との相関

	(価F-1)	(価F-2)	(価F-3)	(価F-4)	(概F-1)	(概F-2)	(概F-3)	(概F-4)	(概F-5)	(概F-6)
	立身 出世	親族 主義	伸び伸び した 存在	自己 制御	可能性	否定的	あてになる 存在	自立的 存在	個としての 存在	了解可能 な存在
保母職 志望度	.317**				.243*	-.259*			.235*	

*P<.05, **P<.01

愛媛県のほうが沖縄県よりも保育職志望度と子ども観との関連が深いことが分かった。

今後の課題

本研究の結果は、保育者養成のための指導技術の育成の基盤として、保育者の「子ども観」が重要であることを示唆するものである。

今後の方向として、子ども観と保育実習の効果性について検討することは、保育者養成にとって重要な課題である。具体的には、子ども観の違いと、子どもへの接し方、指導技術、保育実習の評価等の側面との関連の検討である。

附 記

本研究は、友利久子（日本総合教育研究所）との共同研究の一部である。尚、本研究の実施にあたっては、屋嘉比淳子さんの協力を得た。記して感謝いたします。

参考文献

1. 東 洋 1990 発達と文化 シリーズ人間の発達12 日本人のしつけと教育 東京大学

出版会

2. 藤永 保 1983 児童心理学 有斐閣
 3. 柏木恵子 1978 「子どもの発達・学習・社会化」 有斐閣
 4. 小嶋秀夫 1982 児童観研究序説—児童観研究の意義と方法— 現代の児童観と教育 (三枝孝弘・田畑治) 福村出版
 5. 小嶋秀夫 1983 歴史的にみたわが国の児童発達観 永野重史・依田明(編) 発達心理学への招待1 母と子の出会い 新曜社 P P.185-205.
 6. 箕浦康子 1990 文化のなかの子ども シリーズ人間の発達6 東京大学出版会
 7. 箕浦康子他 1991 新・児童心理学講座第14巻 金子書房
 8. 永澤道代 1996 母親の子ども観と養育態度の関係 追手門学院大学心理学論集 第4号 P P.11-21.
 9. 柴田直峰 1995 保育者の「子ども観」(1) 日本保育学会第48回大会研究論文集 P 208.
 10. 友利久子 1995 地域特性からみた「子ども観」について 日本女子大学家政学研究科 児童学専修 修士論文 (未公開)
 11. 矢野善夫 1992 児童観・発達観の構造と変

島袋 當山 喜友名：女子短大学生の「子ども観」に関する研究Ⅱ

遷 村井潤一(編) 新・児童心理学講座第
1巻 子どもの発達の基本問題 金子書房

P P .61-94.